

三河アララギ

平成二十三年

九月号

第五十八卷 第九号



Yuri. 由

ニューヨーク日記(59) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

July 4, 2011 : Bubbly & fireworks

Blue Shoe Diaries



アメリカ独立記念日は花火の日! NYでは屋上があるバーやレストランは前もって予約しないと直ぐ満員になっちゃう。それにパーティー付きでお値段も何時もより高い! それか、何時間も前に行って陣取り。。。今年は去年と同じバーを予約してアルゼンから遊びに来ている家の家族と花火鑑賞! 夕方になってからバーへ行ったからシャンパンは冷たいまま、日焼けもせずほとんど蚊に刺されなかった!

Independence Day in the US is fireworks day! In NY, all the rooftops with a view of the fireworks will throw some kind of party making it a challenge to secure your fireworks viewing venue. Things, of course, don't come cheap. You either need to pay up for a reservation at such party or be ready to sit for a couple hours, often in the sun. We opted for reservations at a nice rooftop where our champagne remained cool. We had family from Argentina join us this year which made the day more special. So much so that we even made a stop by Times Square on the way home!

目次

第五十八卷第九号(通卷六九三号)

表紙 つわぶき	今泉 由利 (1)	枇杷の実	山口千恵子 (26)
ニューヨーク日記(59)	Blue Shoe (2)	防人の地へ(4)	夏目 勝弘 (27)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」	(4)	ステッキ	秋山 逸穂 (28)
歌集二本の木	杉浦 弘 (5)	変わりゆく地球	伊藤 忠男 (28)
海かげろふ	岡本八千代 (6)	暁の	白井 信昭 (28)
母に似る	白井 久吉 (7)	贈呈誌 七月号	白井 信昭 (28)
フィトンチッド	今泉 由利 (8)	「ことよせ」	いーはとぶ (30)
ミニトマト	伊藤八重子 (9)	シヤツキリ	阿部 淑子 (30)
朱鷺色	弓谷 久子 (10)	私の一首	佐々木利幸 (31)
試歩	青木 玉枝 (11)	「俳句」	白井 久吉 (31)
モジズリ草	内藤 志げ (12)		杉浦恵美子 (31)
「母さんだ!!」	安藤 和代 (13)		植村 公女 (32)
お手玉	林 伊佐子 (14)		一石 (32)
お裾分け	胃甲 節子 (15)		喜仙 (33)
仏様に	金津 文枝 (16)		皓一 (33)
親切に	半田うめ子 (17)	絹の話(9)	今泉 雅勝 (34)
励まし	清澤 範子 (18)	物理学者と詩歌の世界(20)	今泉 一石 (36)
夏帯	近藤 映子 (19)	鎌田敬止という人(五十七)	鮫島 満 (38)
花火	伊与田広子 (20)	和歌から派生した季語の本意(その十四)	佐藤 喜仙 (40)
しみじみと	杉浦恵美子 (21)	「水魚」のことから(128)	岡本八千代 (41)
報告	北川 宏廸 (22)	ことのはスケッチ(393)	今泉 由利 (42)
南風	堀川 勝子 (23)	和菓子街道(59)	平松 温子 (43)
「リンゴの歌」	平松 裕子 (24)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	平松 温子 (44)
今し開かむ	小野可南子 (25)		

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

あかときにあつき曇りにこゑかれて啼きすぎゆきぬ明鳥のこゑ

P
175

庭の上の光に蜂のとびめぐりまた妻とただふたりのこりぬ

P
177

歌集 一本の木

杉浦 弘

しみじみと雨の降れば目白らはひたすら黒きツゲの実を食む

メジロらの食み零したるツゲの実が三和土の上を遠くころがる

二年を庭に來りし目白らの今年來らずツゲの実こぼる

海かげろふ

蒲郡 岡本八千代

さざ波の海かげろふのほの光り消えつつもまたそのほのひかり

およそ人ははかなきものと思ひつつ見てをり今日の海かげろふを

訃報ありまた訃報知る若き人らいのち悲しよ海かげろふよ

お姉さんと呼ぶ人今もわれにある嗚呼お姉さんより先に君は消えたり

われにあるその日その日よいつしかに朱き夕空ひろごりつつあり

注文の「作歌文法」の本届く急に聞え来トビの鳴き声

東京より七里ガ浜へ転居せし友に逢ひたし急に逢ひたし

七里ガ浜袖ガ浦ともいふらしきわが西浦と海はつづくよ

風吹かば袖ヶ浦にも風吹かむはろけき海路のそれぞれの風

いつしかに今夜は下弦の細き影やがて充ちくる月光待たむ

つきかげ

母に似る

新城 白井久吉

井戸端に紫蘇しその葉洗ひ山と盛る妻の姿は亡き母に似る

子ツバメを襲はむとして壁を這ふ蛇をはねのける杖の先にて

わが家の軒に初めて育ちたる子ツバメはいづこにゐるや

日の沈むころに出で来て一時間ゴマの間引きが今日の作業なり

元住みし古家解体の工事にて山野草はみな土に埋まる

菊作る鉢も支柱も輪台も農舎の奥に集めたるまま

半年も山路を歩くことなく夏ウグイスの声も聞かれず

文庫版「草書の事典」一冊をいねつつ見むと枕辺に置く

剪定せんていの時期が悪いか切り過ぎかムクゲはいまだ蕾せみさへなし

警報は解除なりて雨止めど田畑は未だ冠水のまま

フィトンチツド

東京 今 泉 由 利

中心も果もなくして宇宙とふ今日の一日も恙無く過ぎ

光速を越ゆる膨張してゐると宇宙のしじまたただ見上ぐ

杉の木の育たぬといふ島にゐるヒカゲヘゴの毛むくじゃら良し

オリオン座ペテルギウスに一大事超新星と爆発すると

オリオン座の六四十年未来のこと思ひ描けりそのオリオン座

全身をフィトンチツドに晒しつつ幾重にも山山の緑よ

人工の放射能を身に纏ひ滝のしぶきの天然放射能

何億年前に出来しか巨ひなる巖の雫ポタポタ濡るる

朝の日はいまだ閉ざせる瞼まで木漏れきたりぬ中軽井沢

目覚めには真紅の花に出会ひたり夕べに萎へて花落つる音

ミニトマト

豊川 伊藤八重子

赤々とのうぜんかづら庭に咲き老い勝りつつ今年も暑し

杳かとなるご先祖さまの奥津城に枯花替へる夏となりたり

暑に負けて居間に籠れば繭の木に衣蝉ころも鳴く七月二十七日

千代紙をちぎりちぎりて絵の向日葵指先使ふわがデイケア

踏みどころなくなる草と野菜の庭に茄子の花紫鮮やかにみゆ

梔子くちなし咲きアガパンサス咲く娘の庭にめぐりめぐり季を我も楽しむ

娘の庭に高く香れる白き花梔子の木はわが庭より来たりて

洋傘を差しかけられしひと本に真っ赤に色づくミニトマト光る

半月を別れてくらす翁より今日も届きぬ淋しげな声

図書館に勤める娘より十冊程近代文学集のおさがりを受く

朱鷺色

豊川 弓 谷 久 子

染めむらも又趣か梶子の実にて染め上ぐ真白き絹を

スカーフに少し派手かと朱鷺色は染めたる絹を身にまとい見る

二十八度の部屋に姉は眠りをり酷暑も炎暑も何処吹く風と

御津川の水嵩如何にと案じらる篠つく雨は尚降り止まず

泰山木の厚葉の中より今年の蟬の聲の激しき真夏来れる

戦中と戦後が我の青春なりきくらしも心も貧しく過ぎし

日の丸の小旗をもちし児の人形我が小学生の姿のままか

出征の兄を囲みし家族の写真我が父に似た人形の立つ

残年は未知なればこそとうたはれしスエ先生の今日は命日

浄願寺輪読会の三十年スエ先生との縁なりけり

試歩

伊丹 青木玉枝

文月に入りても梅雨は続きおりそろりそろりと試歩の始まる

遅くとも歩ける足に夢を乗せ杖にすがりて梅雨の晴れ間を

歌一つ生れば止まりメモ帳に木陰に坐り一休みして

梅雨明けの朝に嬉しやベランダに朝顔二つ初めて咲きぬ

足なへて行動圏もせばまれば潮騒の音に故里なつかし

一泊のシヨートステイの体験日初めて味はふ心落ちつかず

窓を明けまずは青葉に深呼吸今日のひとつ日を如何にすごさむ

庭木々の緑が雨に濡れてゐる今朝は雀が一羽も来ない

亡妹の形見となりしこの黒日傘ひがさ夏陽を避けて凌霄花見上ぐ

戦争の二文字悲し八月が巡ればルソンに眠る君しのぶ

モジズリ草

豊川 内藤 志げ

庭芝に一本のみのモジズリ草屈りて見る捩れて咲くを

何時しかにモジズリ草は五本いっもとに何処よりこし知るよしもなく

百日紅地に触るるまで花枝垂れのろのろ進む台風の雨

台風より葱を守らむトンネルのビニール二枚合せて被す

泥濘に足を沈めつビニールの押へを直す声を掛け合ひ

藪よりの涼しき風は網戸を通す椅子に腰掛け地下足袋を脱ぐ

作業場の涼しき風を楽しみつつ洗濯終りのブザー鳴るまで

土色に寸にも足らざる蟪蛄が鎌をかかげて小走りにゆく

受粉せずわき芽もかかず暑き日の続きで西瓜あちこちに成る

葉陰よりジャンボ南瓜を見つけしに草取りはずむ暑き日の暮れ

「母さんだ!!」

豊川 安藤 和代

鶉も雀も啼かぬ今朝の空石巻山は黄砂にけむる

馬鈴薯に薄紫の花咲けば孫等の好きな夏も近づく

しなやかに点字読みゆく白き指ひそむ強さを友は持ちをり

はつ夏の陽に畑土の柔らかし今日六本の茄子苗植うる

ソフト部と部活決りて登校す孫の足音軽く弾みて

ソフト部の厳しき練習に耐える孫絶対やめない語尾強く言う

草ぐさの伸びいる中にスカンポの紅ひときわ夏に入りゆく

風の夜の棕櫚の葉ずれのさわさわと独り聞くこの淋しさもよし

嫁の形見のブラウス着れば「母さんだ!!」孫のひなのごとびついてくる

忘れし馬鈴薯の芽のほの赤し薄暗がりの納屋の片すみ

お手玉

岡崎 林 伊 佐 子

四枚の絵柄つきたる布きれを縫い合せゆく丸き形に

わが子等にお手玉、手鞠を作りたる五十年前のよみがへりくる

友達にお手玉あげれば喜びて昔をしのぶ遊具といえり

終戦後の粗食に逝きしわが母よ物余る世に生きて思ほゆ

かくれんぼすること野菜の影に寄り休憩しながら心遊ばす

無農薬のトマトはそのまま間食になりて働く海の日今日は

槌もちて支柱立ててくれし友親切身にしむ共同畑は

草木灰は野菜の葉の面に散布する薬剤使わぬ自然農業は

雑草と虫と闘う畑仕事われの理想の余生を送れる

雑草は野菜の根元に敷きてをく猛暑続きの乾燥ふせぎに

お裾分け

豊橋 胃 甲 節 子

公園の美術館の絵の展示看板見つつ通過し哀しみ広がる

よべよりの雨は荒ぶる事も無く久し振りなる涼しき朝なり

お裾分けと戴くメロン大きくて飾り置くべし匂ひ立つまで

将来を思ふ事無き空しさよ夜半の思ひは過去のみ彷徨ふ

此の夏を事無く超ゆる確信も無きまま今日を生かされてをり

七夕のロマン断たれし雨の日の暑さ忘るる涼しき一日

仄暗し晴れ渡る朝の静寂を濃密に保つ裏の木々の葉

猛暑日の続く庭にてギボシの花紫爽かに咲き続きをり

頼り無く猛暑に倒るる夫なれば吾身も危ふき案づる苦しき

自然には勝てず逆がふ術も無く吾は怖るる自然の脅威を

仏様に

島根 金津 文枝

五年越しの瓦斯電話電気水道領収書捨てる六月の終り

身辺整理すれば磯夫先生より夫に歌碑建立の絵ハガキ立派な大きさに驚く

歌碑の下磯夫とハツキリ掘り白く細長く松の木に並ぶ

五月二十九日布部ダム山佐ダム放水サイレン頻り市中に響く

雨の中句友より粽五本ぬくぬくを佛様にと持ち来て戴く

平成二十三年五月二十七日齊藤茂吉記念歌集三十七号しきり読む

今泉由利先生の歌わが歌今年も戴り心して読みゆく

杉の館やかたタブの丘春蟬しきり啼くヒバリも巢造りに励む

水上花壇赤き睡蓮鯉も大きく人の足音に泳ぎつきゆく

風強ければ洞光寺銀杏大木青き実葉が境内に散らばる

親切に

新城 半田うめ子

山あじさい数多咲く道眺めよく温泉へと向ふなり楽しかりけり

孫香奈の運転なりぬやさしきの言葉を聞きつつ温泉へ向ふ

夕暮れの杉林の上眺めつつ輝きて見ゆ十五夜の月

助けられ温泉の窓辺孫香奈の親切にして館山寺温泉

横たわりゐる吾の上猫の来てねむりてしまふ愛らしきなり

枇杷の木の数本ありき吾が父は楽しみをりき現在伐られてしまひ

何鳥か杉林の中鳴きいつつ昼の食事を食みてゐるらし

夜の過ぎ義母と二人山桜咲きてゐたりき千種の森にて

励まし

春日井 清澤 範子

自転車の重心とりて乗り行きて八王子神社に詣で心休まる

吾病めば足腰の痛みこらへつつ夫は菜園の玉葱を扱ぐ

泣く程に吾の心の弱まりて夫の励まし言葉やさしも

母の日に花が好きとて園芸店に娘は買ひたりカクタス一鉢

腰痛をかかへ持つ夫脊柱間狭窄症の手術を決める

歩けなくなりたる夫は吾の押す車椅子にて病院へ来し

三時間の手術は終り吾が夫は酸素マスクをつけ吾が待つ室へ

手術する前に本を何回も読みて介護する吾は頑張る

手押し車押しして廊下を歩く夫つひに手術をすると決めたり

手術終りし夜点滴の数多くして血圧、体温吾は記録する

夏 帯

名古屋 近藤 映子

水無月の終日近し真夏日の夫の発熱気になりて

文月の初日はもはや真夏日の三十度越す蒸暑さ

曇りてもバスにて今日も出掛け行く夫と一時テレビ見る時

七月となりて続きぬ雨の日よ蒸暑き夜の続きぬ

我娘私の夏帯お下りと思えぬ様に似合の姿よ

七夕の過ぎて真夏の暑さの続くティポット持ち夫の元へ

七月の中葉の猛暑の日陽は強しベランダ歩く亀も鉢陰に

真夏日の続けばベランダの鉢植の「おもと」まで枯葉の目立つ

我夫の今落つきてをり穏やかにテレビ見る顔見届け帰る

漸くに夏場所名古屋に始まりぬ国技の自覚は一人一人に

花 火

豊橋 伊与田 広子

尚忠は指揮者とばかり思ひしに作曲家とは初めて知りぬ

N響にて父親の作品の指揮をする尾高忠明笑みを浮べつつ

莫大なる作品残したるモーツアルト若くして亡くなり惜しまる

蝉一匹鳴き出し初めぬ晴れし朝暫く鳴きて遠ざかり鳴く

毎年まいとしの繰り返しなるも待ちをりぬ祇園の花火見るも楽しき

例年は祇園と共に梅雨明けむ今年は早明け祇園待ちをり

わが家いえの二階の西窓花火見ゆ朝から開けて確かむるなり

午後六時大音して花火出づ雑用止めて二階へ上がる

打上ぐる花火は次第に豪華なり複数上がり連発となる

次々と追ひ越されながら歩み行く人々皆われより若きなり

しみじみと

蒲郡 杉浦恵美子

しみじみと語らふ夫も居なくなり今年の夏至は淋しかりけり

重けれど片手に提がる骨箱に我が最愛の夫納まりぬ

骨太の生前そのまま骨箱にぎつしり納まる我が最愛の人

病気前はあまりに活発それ故に病み衰へし姿が切ない

何故泣ける我が惨めさか先に逝く夫の無念を思ふ故にか

逃るるがごとくに豊橋去りたれどこの形原に夫居るでなし

この痛み罰ゲームかと夫言ひぬ五十六年人生最後の

夫の居ぬこの現世は今只色無き世界流るる時間

療養の夫の唯一楽しみは大相撲なりき付き合ひて見し

魁皇の不屈の相撲に我が夫は見入りて居たり同郷なれば

報告

東京 北川 宏 廼

冷房のききたる室に母眠るよき報告はおめざのときに

自らの限界に挑む母をみればわれは何かをせずにはをれぬ

卒^{そつ}を過ぎ意のままならぬ^{からだ}躰でも母は死ぬまで「牛飼ひ」やめぬと

もうだめだと四回クリア五回目のPK戦もクリアすなでしこジャパン

女性たちをこれほどまでに掌握する監督佐々木は男の男だ

われもまた妻の助言に従ひて身なりと鼻毛に注意をしやう

ひとかけら群を外れて浮かぶ雲われにも似たり妻にも似たり

絆とか愛とかいふ薄き言葉暑くあふれて七月終はる

今日もまたつづく猛暑に携帯の待ち受け画面を冬の琵琶湖に

クラス会まです黙禱に始まりぬ手を振り合ひて別れのときは

南瓜

豊川 堀川 勝子

へぼ南瓜ぐいぐい蔓を伸ばしつつ畦の隅ずみ覆ひ尽しぬ

かぼちやの蔓の太き穂先を無理矢理にアーチの支柱に括りてやりぬ
節太きかぼちやは棚に絡みつつ二つばかりの実を結びをり

しほみつつ葉に隠れゆく南瓜たふなすの成り花は愛し母に重ねて

アーチの綱に絡み付きつつ実の太る南瓜よ南瓜涙ぐましき

里イモの広葉に残る朝の露コロリと落ちぬこ芋のあたり

孫一人い抱くここに狼狽へる今年西瓜の重量十三・五キロ

取り毀す物置整理の手を止めて古き手紙を又読み返す

物置に仕舞ひ込まれて使はざる電気オルガンつひに手放す

シンプルな暮らし目指すは夢なれど常にかさばる己がひとりの

「リンゴの歌」

豊川 平松 裕子

店内に入れば見ゆるサラスワテイ一度も手を合わせざりしよ
売り物か飾り物か信仰かサラスワテイを祀る店主よ

日本名は弁財天なりサラスワテイ琵琶持つ指の嫺やかなる女神
読み続け疲れて閉ぢてまた開く開店時刻より閉店時刻まで

午前より客なき店に読み続く相馬黒光「黙移」といふ本

しばし目を閉ぢて思はむ「黙移」といふ本の時代に生きゐし人々

我と共に生きゐる自動巻腕時計我より離せば止まりてしまふ

連なれるビルの稜線デコボコに切り取られをり今日の青空

吾が歌ふ「リンゴの歌」の途中より合はせて母も声張り上ぐる

「リンゴの歌」最後の一節を高く歌ふ母はまだまだ歌が歌へる

今し開かむ

豊川 小野可南子

ゆつくりと列車がホーム発つせつなシートベルトを危ふくさがす

青葉若葉撓へる枝の重なりを結ぶがに見ゆ梅雨の雨降る

梅雨明けを聞きたるばかり西の空ま白に高く入道雲よ

庭芝にひとと生ひしオヒシバの強くしありぬその影さへも

朝採りの胡瓜喜ぶこの家の玄関砌にそつと置きたり

垣高く咲きつぎ咲きつぐ朝顔の今朝のひとつは今し開かむ

共に歩く佑真は一瞬のけぞりぬターン素早し燕の飛翔

そぞろ歩く我と佑真の夕まぐれ燕ともなり田の中の道

隣境の泰山木の中ほどに今年の蝉も御衣の声

梅干しとなりゆく梅の赤々を今宵はそのまま夜露にあてむ

枇杷の実

豊川 山口千恵子

実生なる枇杷の木になる枇杷の実を挽ぎて食みたりその実の甘し

畑隅の実生の枇杷にも実の生りぬ大粒なる実挽ぎて集むる

種多きこと言ひながら皮を剥きガラスの器にビワの実をもる

美しく花ひらかんとする少女さらせる脚のすらりと長し

童女より少女にかはりゆく孫の舞台衣裳のドレスの栄ゆる

水に動く埃の如き小さき物見てゐて楽し殖えたる目高

目に追ひて数ふる小さき動く点二十余りの目高の子

首かしげ思案顔なるトカゲの子つと草群に一瞬ののち

窓の辺の楓の枝の間より見上げる朝の空は青空

白しろと細かき花の付きてをり夏の日に咲く金柑の花

防人の地へ(4)

豊川 夏目勝弘

政庁の跡地はなれて山裾を明日香の里を歩む思ひに

野の川のS字に曲る高きとこ白壁土蔵に浮ぶ景あり

冬の田に細き間道くねる道長き土塀の白あたらしし

僧房の礎石にカササギ降りたちぬ天然記念種に遇へし幸

春草の色の目にたつ観音寺日本最古の鐘は見ずとも

とりあへず天満宮へと鳥居をくぐる政庁あとより二キロの歩み

願ひなく黄色の硬貨を賽として一札深く天満宮を去る

癒ゆるなき病に愛を拒みにき野の花薬壇に挿し忍びしか

ただ唯に医師を信じて海見ゆるここ筑紫にて生命うたひき

防人と同じ東国の長塚節西国筑紫に病と戦ふ

ステッキ

「招待」 秋山逸穂

豆腐屋の湯気は窓より流れだし夜明けの街にとけこみゆけり
ひたすらに雨に降らるる畦道よりかすんで見えるバス停留所
アスファルトを激しく叩き飛沫あげ夜明けの雨は側溝みたす
神立は縦横無尽に駆け巡り雨に降らるる街照らしおり
雨模様なれども散歩にいでんとすステッキがわりに長い傘持ち

変わりゆく地球

大阪 伊藤忠男

雨粒の頬打つ痛み消えゆきぬ心に傷の残るこの雨
何か変変わりゆくかなこの地球人の力はなんとも無力
夏空に心ほぐせりうるこ雲遠き彼方に秋の気配し

暁の

豊川 白井信昭

暁の新幹線の高架下一陣の風吹き抜けゆけり
待合室のひとつの窓を埋め尽す櫟大樹の萌えたつみどり
前屋根の上にいでこし満月の光あまねし畳に届く

贈呈誌 七月号

「秋田アララギ」

眞野ミチ

凍て土の黒くゆるみぬ朝来て畑に青める太葱を抜く

飯塚ミエ

それぞれに老いて幸の異なるか友の意外なことにうなづく

「愛媛アララギ」

松浦時代

ひもすがら海に向かひて目をつむり波の音聞くひと日が欲しい

松本マス子

ちらほらと生えしワラビを手折り行く気温定まらぬ春を言いつつ

「鹿児島アララギ」

井尻美智子

赤柏みどりとなりて暗き下明るめて咲くかたばみの花

増田教子

雲多き一日の暮れに差す光部屋に入り来てうれしき夕べ

「高知アララギ」

高橋幸恵

石楠花も藤も牡丹も咲き誇る家に主はいまだ帰れず

種田恵美子

床に入りまなこを閉じて思いおり明日のことを命のことを

「滋賀アララギ」

稲垣澄子

転作の畑に立てたる黄の標作目大豆と小さく記す

晴れわたる早苗田つづくふる里のはるかかなたの伊吹はまろし

小杉恒子

「冬蕾」

河津和子

小さき葉の何れも公孫樹の形して巨木が並ぶ甲州街道

冷飮鈍公孫樹葉入りを娘と啜る若かりし夫と寄りたる店に

「椋」

木下文子

隣家の雪に傷みて外れたる波板ひと日吹く風に鳴る

中尾和子

さ緑の楓枝張り朱の塔に触れむばかりの風ある朝

「群山」

今氏貞子

雪の面に杉毬数多散らばりて雪深き村の夕暮れ早し

氏家真紀子

目の前のことをひたすら果すべく心勵まし長き日を終ふ

「榎の木」

吉永百世

エプロンの紐うしろ手には結びがたし苦心の末のこのたて結び

漆畑八江子

ひじき煮て黒く焦がしし圧力鍋雨の厨に終日臭ふ

「穂の原」

大谷登美子

日本史にありし少年使節団の訪ひしエヴオラへ期待もて行く

神谷叔子

背景に菖の花揺れ写さるる並べば友の笑顔のうれし

『リムよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

手から手へ渡されし回覧板けふも郵便受けに雨に濡れをり

稲吉友江

乗鞍の豊平に春遅し君は我が手に雪のシャーベットを

鈴木美耶子

白と青紫陽花模様のこの夏帯祖母と母との締めたる帯よ

吉見幸子

わが家族三人揃ひしこの夜更け十五のグリは旅立ちてしまふ

牧原正枝

五十年前買ひし宮島のこの花瓶に白きダリアの花一つさす

岩瀬信子

かぼちゃの花咲くを楽しみ朝な朝な畑見廻る受粉などして

三田美奈子

シヤツキリ

東京 阿部 淑子

梅雨明けの間近になりし陽光は西空にあり雲を射抜きて

ジャンプして駅トイレの裏戸まで雑巾廻す女性に会いぬ

エイゼットの体操に集う面姿シヤツキリしたり半年にして

私の一首

寒き今朝は八畳一間に籠りつつひたに読みたり日本合戦譜

佐々木利幸

日本合戦譜（文春文庫）は、松本清張が認めたもので、日本を代表する九つの合戦を取り扱っているが、その内、戦国時代の合戦は七つも含まれている。

私が注目しているのは、清張が合戦をただ権力者側ではなく、庶民の側、すなわち民衆のまなざしで見ようとしている点である。

三河で行われた長篠の合戦に私は関心をもっているが、敗者の立場に立って、歌を詠みたいと思っている。

午後の五時人夫の帰りたる後で残すべき物を集めてまはる

白井久吉

現在の住宅のすぐ前方一段低い所にあつた古い家が元の住居で物置として利用していた。最近雨もりはするし破損して危険でもあるから解体することになった。契約して五日後には仕事が始まった。仕事をしている間は近寄れないので、一日の作業が終つてから残す物を調べたわけである。貧乏育ちの故か、処分するには惜しい物が沢山あるが仕方がない。工事は十二日間で終了した。若いころ集めた図書や机や戸棚など失つたのは残念である。

やれやれを百遍ほども繰り返しさうしてけりをつけむと思ふ

杉浦恵美子

実は退職の年の後半、夫が入院しその介護と三年生の担任というどちらもゆるがせに出来ない重圧がのしかかつて来ました。毎日毎日折るように「ああこれで今日も何とかしのげた」と過して来ました。そしてようやく待望の退職の日を迎えました。しかし共に喜び労をねぎらつてくれるはずの夫は入院中。ひとりで自分に向かつて「やれやれ」とつぶやいて、一回では足りず何遍も繰り返し、教員生活のけりをつけたかったです。

「俳句」

「はやぶさ」で突っ切ってゆく夏の川

植村公女

居酒屋の津軽三味線夏闌ける

十薬や本郷菊坂雨となる

夏蝶やおのれの影を追って舞ふ

一石

西瓜喰うカラスにだって三分の理

炎暑なり猫の時間の緩きこと

ちらちらと星影見えし木下闇

喜仙

菖蒲田を渡り来る風甘きかな

端居して億年よりの光受く

振り向けば影のみじかし油蟬

皓一

七月や淋しさつのる油蟬

日焼け止め鼻高くしてゴルフかな

絹の話 (9) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹とアヘン戦争

絹は古来から世界の万人の羨望する繊維であり、どんなに化学繊維が発達しても変わる事はありません。化学繊維はいつも絹に近づこうと云う歴史でありました。

絹は権力者にとつて国を富ませる重要な戦略物資でありました。長きに渡つて守秘し続けてきた中国の絹の製法も、10世紀にもなるとフランス、イタリア、スペインなどヨーロッパ各国に伝わつて行き、生産も順調でした。ところが18世紀後半東ヨーロッパからスペインに至る迄、蚕が死滅する病気が発生し、自国産の絹が無くなつてしまうのです。産業革命が起こり、動力による新しい設備とシステムが整い始めた時でした。ヨーロッパ各国はこのままでは再び中国の思うがままになつてしまう恐れを感じていました。

その頃海では、海上交通路が確立され、イギリスを中心に各国はインド、インドネシアなど各地を植民地として、スパイス獲得競争に明け暮れて巨万の富みを手中にしています

た。インドの西岸及びインドネシア各島はほぼ支配勢力が決まり、次ぎなる進出のチャンスをうかがつていた時期でした。イギリスはオランダが中国のアモイで絹を積んでヨーロッパに運び、日本の長崎に降ろしてポロ儲けをしている事を知つていて、シルクロードの陸上輸送より船の方が大量に運べてコストも安いことも分かつていました。ヨーロッパでは絹が品薄で高騰しており、清朝の力は弱つて来ていて、まさに絶好のチャンスがひらけていました。イギリスは策を弄しアヘン戦争を仕掛けて行くのです。結果、香港を手に入れたオランダを排除しながら東アジアに確固たる橋頭堡を築き、絹ばかりでなく、幾万の物資や利権を得たのです。

この様子は琉球を支配下に収め、海上交易で潤っていた薩摩藩がよく把握していたようです。また薩英戦争を通じてイギリス艦隊の強力さも身をもって体験していました。勿論アヘン戦争によって何が起つていくか種々の情報を入力していました。やはりヨーロッパ列強の主目的はインドの木綿、東南アジアのスパイス、極東の絹と云う事に疑いがないと再認識していました。

一方開港間もない横浜には絹を求めるアメリカを主とし

た貿易商が殺到していました。それまで日本は絹の大量の輸入国であったのが、急速に輸出国に転じ始めたのです。

ところが、そうは簡単には輸出が出来ませんでした。日本の絹は各地の地場産業でしたので、家蚕ではありませんが、蚕の種類もまちまちで、糸の製法もそれぞれでした、統一した規格と云う概念がなかったのです。既にアメリカ、ヨーロッパは力織機でしたので規格化された糸を求めていたのです。当初は発注側（洋装用の糸）と生産側（和装用の糸生産の経験）双方で糸作りで難澁を極めたようです。それでも絹の売買の熱は衰えるばかりか活気を帯びてゆくのです。

この時日本は明治維新となるのです。新政府の要職を努める薩摩出身の大久保利通はじめ諸氏は立国の基幹産業を「絹」に焦点を当てたのです。

直ちに絹の規格化に取り組み、絹の定義を定めます。其の時「野蚕はこれを除く」と定められ今日に至っております。同じくして蚕種を国家管理にする事を決め、各地で個人の蚕の交配を禁じ、各県庁に蚕糸課を設け、蚕糸試験場を次々に設置し、蚕種保存所も設けました。その指導によって農家は養蚕をする事になりました。その成果には目ざましいものが

ありました。（数年前上記の法律はなくなりました）

明治政府もお手本を示すため、繭が無くなって稼動しなくなったフランスの機械を購入し、技術者も招聘して、富岡製糸所を開設すると、徐々に成果が現われ、その後年経ずして質量ともに中国を凌駕し、世界の絹の価格形成権を日本が手に収めるのです。その生産と輸出はすざましい物で、昭和10年代太平洋戦争が始まる迄、日本の輸出総額の40%以上を占めるに至り、このお金で近代化を進めると同時に、軍備を拡張して行きました。

将に「絹は国家なり」の近世版でした。

明治開国に際し、指導者が弱肉強食植民地主義を押し進める列強国に伍して行かなければならない選択を迫られた時、その時代の世界の潮流とニーズを読み、緑豊かな山野と勤勉な農民に賭け、絹を選択した事に敬意を表するばかりです。

絹五千年の歴史の中で日本が価格形成権を維持出来たのはおよそ100年弱、今日では質量共に中国で、40万トン超を生産し世界をリードしています。丁度最盛期の日本の生産量に並びます。昨今の日本はその400分の1程度の生産せしうか。

物理学者と詩歌の世界 (20) ーマレー・ゲルマン

一石

マレー・ゲルマン (Murray Gell-Mann・1925-) は、ニューヨーク生まれのユダヤ系物理学者。幼少時から神童の誉れが高かった。イェール大学から修士号を、MITから博士号を取得後、1951年からプリンストン高等研究所の研究員、コロンビア大学客員准教授、シカゴ大学准教授を経て、1956年27歳でCITの教授となる。1969年、「素粒子の分類と相互作用に関する発見と研究」でノーベル物理学賞を受賞(参考資料1)。受賞理由は「クォーク模型」の提唱にあつた。1964年、坂田模型(参考資料2)を拡張しハドロンの内部構造を記述する模型がゲルマンとG・ツバイクによってそれぞれ独立に提唱された。それは基本要素として、坂田模型の各要素の電荷をそれぞれ1/3減らしたものの(クォークと命名)をとり、現実の中間子(メソン)は従来どおり要素と反要素の2体系とするが、重粒子(バリオン、注1)は要素だけの3体系とする。この模型は当時発見されていた多くの粒子族をうまく整理できたので、次第に広く受け入れられるようになった。現在、クォークは現在の究極粒子とみなされ、標準理論の基礎を成している。ちなみにクォークという名前は、ゲルマンがジェイムズ・ジョイスの小説『フィネガンズ・ウェイク』(注2)に出てくるガチョウの鳴き声からとってつけたもの。他にも中野・西島・ゲルマンの法則やくり込み群方程式、R・ファインマン(参考

資料3、注3を参照)との共著による弱い力のV-A相互作用の理論、カレント代数の提唱など多数の業績がある。またクォーク、ストレンジネス、カラーなどを命名したことでも知られる。

1990年代から彼の主な関心は「複雑系」に移り、この分野の研究で有名なサンタフェ研究所の設立に中心的な役割を果たした(参考資料4)。13ヶ国語を操り、(創造性思考の)心理学、人類学、考古学、鳥類学、(学習を伴う生物・文化の)進化などにも造詣が深い。これらを統合する試みとして複雑適応系の理論を發展させている。著作には一般向けに複雑系を解説した「クォークとジャガー たゆみなく進化する複雑系」(草思社)がある(注4)。

この著書との関連で、エピソードを1つご紹介する。2009年6月、石川県でオタマジャクシが空から降ってくるという「怪事件」が起こり、「超常現象」ではないかとちよつとした騒ぎになり報道された。このときの拙句

羨まし おたまじゃくしが 降るとかや

を所属するUSA田鶴の会に投句したところ、会員から「一体そんなことがあるのか」と訝しがられた。ところが後に、ゲルマンの上記著書中に次のような記述を見つけた。「私は野生生物・魚類省のために生物学の調査を行っていた。その日の午前中、7時から8時のあいだに、2インチから9インチまでの大きさの魚が道路や庭にも落ちて、

この南部の町マークスヴィルの住民を驚かせた。(以下略) (1949年4月22日号の『サイエンス』、W・R・コーリスの記事から引用)。続けてゲルマンは「淡水魚が空から降ってくるといった、ふつうでない方法で運ばれる」可能性がありうるとする、(動物の種の分布を研究する)動物地理学者の説に言及している。さすがに博学のゲルマンと恐れ入った次第である。

ゲルマンの残した言葉から。

○美しい方程式の方が美しくない方程式よりも真実に近いといえるか？

○「私はこの分野を複雑系とは呼ばず、プレクティクス (plectics) と呼んでいる。これは私が1984年に考え出した、ラテン語の語源のシンプルとコンプレックスの意味に相当する語を合成した言葉です。つまり、この1つの研究は単純さと複雑さの両方を研究する意味がある。」これはA・グースの「最近ゲルマンは物理学の分野から逃げてしまい、私にはさっぱり分からないこと(複雑系)をやっている」の批判に対して述べたコメント。

○科学は階層をなしている。第1の階層は宇宙の全てに通じる法則だ。つまり、熱力学やクォーク理論などだ。第2の階層は地球でしか通じない法則だ。例えば、生物学などだ。第1の階層には偶然が入り込む余地はない。しかし第2の階層には歴史的な偶然が非常に複雑に含まれる。もちろん自然淘汰の圧力もかかる。何かの偶然で我々が全く違った人類になった可能性さえあるのだ。

注1: バリオンとは陽子や中性子およびそれらの仲間の粒子を総称した呼び方。元々は質量の大きい「重い粒子」の意味。

注2: ジョイスはアイルランド出身の小説家。『フィンガンズ・ウェイク』は難解な小説として有名。

注3: ファインマンとゲルマンはどちらもノーベル物理学賞を受賞、それも同じ大学の同じフロアに研究室があり、同じような研究で競争していたライバルであった。二人は性格的に正反対だったようで、ゲルマンはプライドの高いかにもインテリという風貌、それに対してファインマンは天才肌で悪戯好きの陽気なニューヨーカーといった感じだ。

注4: 上の書名『The Quark and the Jaguar: Adventures in the Simple and the Complex:』は Arthur Sze の詩の一行 "The world of the quark has everything to do with a jaguar circling in the night." に由来する。

参考文献

- 1) Wikipedia. the free encyclopedia
- 2) 三河アララギ, p 36, 第58巻, 第8号 (2011)
- 3) 三河アララギ, p 36, 第57巻, 第12号 (2010)
- 4) http://tuvalusantaledu/mgm/Site/Front_Page.html

鎌田敬止という人（五十七）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（19）〉

昭和二十三年一月の野溝七生子宛の書簡で、『智恵子抄』のことは一切関係しないことにすると明言していた光太郎が、昭和二十六年の四月になって、『智恵子抄』を澤田に返せと言いだしたところには何があったのか。

光太郎は、澤田に、「昨日鎌田さんからテガミがり、新企画詩歌文庫の第一冊に『智恵子抄』を入れたいといつてみました。これは此のハガキと同便ではつきり断りました。」と書くなど、澤田に対しては心遣いが厚い。中央公論社の「光太郎選集」の編集委員となった草野心平へのはがきには、「詩の採録に関しては澤田さんの迷惑にならぬやう、その意見をたづねてください。」（昭和二十六年四月十一日付）と書き、中央公論社の担当編集者の松下英磨への手紙には、「龍星閣の迷惑にならぬやう、『智恵子抄』『智恵子抄その後』は除外して下さい。」（昭和二十六年四月十二日付）と書いて龍星閣の保護を考えている。なにが光太郎の考えを変えさせたのか。

実は、澤田の光太郎に対する待遇が破格のものであり、光太郎は澤田の言い分を全面的に聞き入れざるを得ない状態になっていたと私は

思っている。

そもそも龍星閣は印税制をとっていないふしがあり、澤田は光太郎に対して随時物品を贈るという形で印税に替えているらしく思われる。光太郎の澤田への書簡は『智恵子抄』初版発行以来、リストアップは省くが小包便への礼で満たされていると言っているほどである。今度の『智恵子抄その後』出版では澤田は粗末な山小屋に住む光太郎に「寸志」三万円のほか住居一棟を贈ることにしている。光太郎の澤田宛書簡には、「今度の御配慮は恐縮至極です。今日は上天気、棟上となりました。夕方小屋組が出来、——小屋組はひどく丈夫です。高さも高く、四寸角の柱が三尺に一本づつ立つてゐます、思の外立派なので、小屋とは言へなくなりさうです」（昭和二十六年四月十五日付）、「六月三日小屋建築が出来上りました、——青畳、腰かけろり、本棚、皆順調です」（六月六日付）等とある。また、澤田は翌二十七年には龍星閣の東京復帰を記念するという名目で『智恵子抄』羊皮特装本限定二百部を刊行している。

定価の一、二割前後の印税を時によつては分割で払う一般出版社の支払い状況とは桁違いなのである。光太郎と鎌田の長い間の絶対的信頼関係はここに来てほころび始めたといっているだろうか。以後、鎌田の白玉書房から光太郎の著作が出ることはなくなり、書簡の往復もなくなつたやうなのである。次に示すのが鎌田が書いた光太郎宛の手紙の残っている最後の一通である。

「智恵子抄」のこと、御心配おかけ申上げ申訳なく存じます。結局は、先生の思召に従ふやうになると自分では判つてはゐたのですけれど、やつぱり智恵子抄への愛著が急には断ちがたくはありましたし、又澤田氏から味はされて来た妙な気持もなかなか始末がつかなくつたものですから、つい手紙が書けませんでした。お許し願ひます。今はもうさつぱりと白玉書房版を絶版いたします。第五版まで刊行をお許しただけましたこと心よりお礼申上げます。

(昭和二十六年五月十一日付)

光太郎を心から敬愛する鎌田は素直にその意向に沿う決意をし、「白玉書房版を絶版」にすることを伝えたのであった。

終わりに

光太郎と鎌田の関係についての章を終わるに当たつて「智恵子抄裁判」のことを付記しておきたい。この裁判の概略を詩人で光太郎（高村家）側担当弁護士の中村稔は、「『智恵子抄』裁判は、龍星閣から昭和十六年に刊行された『智恵子抄』を編集したのが高村光太郎か、龍星閣主人澤田伊四郎かが争われた裁判である」（『高村光太郎全集』月報20）と述べている。中村稔の説明に沿つて経緯をみたい。

発端は、澤田が『智恵子抄』を編集したのは自分だと主張、昭和四十年に文部省に著作権を登録して、光太郎の新詩を加えた『智恵子抄』を刊行していた白玉書房に編集著作権を侵害されたと抗議したこ

とにあった。昭和四十一年に光太郎の著作権継承者である高村豊周が東京地裁に著作権登録の抹消を求めて訴訟、二十一年後の昭和六十三年に高村家の全面的勝訴の判決が出た。澤田は東京地裁に控訴し、また、最高裁に上告したが却けられ、平成五年に最高裁判決が出た。

澤田はなぜ版權を主張するのではなく著作権登録という挙に出たのだろうか。鎌田の翻意を怖れたのだろうか。或いは光太郎没後になつて印税にかかわる思いがあつたのだろうか。中村稔は、この係争の種を蒔いたのは「著作権継承者である高村豊周氏をはじめ関係者に何らの照会もすることなしに、澤田氏を編集者として認め、登録した」文部省にあるとしている。余談だが、私は弁護士中村稔の、綿密な証拠の積み重ねと想像力に満ちた論証の立て方について、最高裁の裁判記録を読みながらただただ驚嘆した。

大正十年ごろに相識つて以来、光太郎と鎌田は著者と編集者という関係を深い信頼を絆に三十年以上にわたつて保つたのであったが、澤田の再出現によつてその歯車を狂わされたのだった。光太郎、鎌田互いの通信が記録のうえになくなるのは昭和二十六年半ばであるが、記録がないだけで光太郎が没する昭和三十一年まで続いたのかもしれない。

思えば、昭和四十年、澤田が引き起こした「智恵子抄裁判」によつて鎌田は亡き光太郎の証人として再び関係を結び、光太郎（高村家）側の勝訴に力を貸したのだった。

和歌から派生した季語の本意（その十四）

「笹」 佐藤 喜仙

39 秋風（秋の風・素風・金風）

「秋風の寒き朝けを佐野の岡越ゆらむ君に衣借さましを」

山部赤人（万葉集）

「秋風の吹きにし日より音羽山峰のこずゑも色づきにけり」

紀貫之（古今集）

秋風と聞くと一般的には蕭条たる物侘しさを連想する。上掲の赤人、貫之の歌もその意を含んでいる。しかし古来より初秋風という使われ方もあり、俳諧では三秋の季語とされた。色に配しては白とし、素風と言ひ、五行に配しては金風とも言う。

例句

石山の石より白き秋の風

芭蕉

庭十歩秋風吹かぬ隅もなし

子規

でで虫が桑で吹かるる秋の風

綾子

40 薄（尾花・芒・芒野・芒原）

「彼の児ろと寝すやなりなむはた薄裏野の山に月片寄るも」

詠み人知らず（万葉集）

「今よりは植ゑてだに見じ花すすき穂にいづる秋はわびしかりけり」

平貞文（古今集）

憶良が「秋の七草」のひとつとした薄は、いづこにも一叢となつて生い茂っている。

尾花は薄の花穂が獣の尾に似ていることから命名された。又「末黒の芒」（春）「青芒」（夏）、「枯芒」（冬）と各季を通して詠まれている。

例句

山は暮れて野は黄昏の芒かな

蕪村

芒野の鳶より低し賤ヶ岳

秋櫻子

頬にふれ那須の尾花のやはらかし

欣一

41 十六夜（いざよふ月・既望）

「ものこのふの八十氏河の網代木にいざよふ波の行方知らずも」

柿本人麻呂（万葉集）

「山の端にいざよふ月を何時とも吾が待ちをらむ夜はふけにつつ」

詠み人知らず（万葉集）

いざよふとは、たゆたい、ためらうことであり、万葉、平安時代は「いざよふ」と清音だったが、鎌倉時代以降濁るようになった。「源氏物語」にも「宣ひしもしるく、十六夜の月、をかしきほどにおはしたり」（末摘花）とある。

例句

いざよひや闇より出づる木々の影

標良

十六夜や片瀬へ帰す姪ひとり

さくの

月よりも雲にいざよふこころあり

比奈夫

「氷魚」のことから (128) 岡本八千代

梅雨が明けて、かんかん照りがつづく、原発の収束はいつのことかわからない。

最近の新聞（読売）に、あの大津波にも岩手の田野畑村に建っていた宮沢賢治の「発動機船」という詩碑だけが残っていた、ということを知った。田野畑村は、北太平洋の三陸沿岸にある村である。そこには三陸鉄道北リアス線が通っている。鳥越駅近くらしい。
どんな詩か？と調べてみた。（以下、賢治全集第四巻詩Ⅲより。長いので一部にする）

発動機船 一（春と修羅 詩稿補遺）

「うつくしい素足に

長い裳裾をひるがへし

この一月のまつ最中

つめたい瑤珥の波を踏み（玉のような美しい）

冴え冴えとしてわらひながら

こもこも白い割木をしょって

発動機船の甲板につむ

頬のあかるいむすめたち

……あの恐ろしいひでりのために

みのらなかつた高原は

いま一抹のけむりのやうに

この人たちのうしろにかかる

赤や黄いろのかつぎしで

雑木の崖のふもとから

わづかな砂のなぎさをふんで

石灰岩の岩礁へ

ひとりがそれをはこんでくれば

ひとりには船にわたされた

二枚の板をあやふくふんで

この甲板に負ってくる」（以下略）

（二）、は割木を背負って、発動機船に積みこむ東北の女性たちの働く姿が描かれている。

発動機船 二（ほぼ略して。）

「真つ黒な藻の群落も手にとるばかり

いきなり崖のま下から

一隻伝馬がすべってくる

船長はびたりとラッパをとめ

そこらの水はゆらゆらゆれて

何かおかしな燐光を出し

近づいて来る伝馬には

木ぼりのやうな巨きな人が

十人ちかく乗ってる」

（二）は、発動機船へ伝馬船を漕ぎ寄せてくる景で、筋骨たくましい男たちを描いている。

発動機船 三（四）は題材が三と重なる一略）

「石油の青いけむりとながれる火花の下でつめたくなめらかな月あかりの水をのぞみちかづく港の灯の明滅を見まもりながらみんなわくわくふるてゐる

……水面にあがる冬のかげろふ……」（略）

（三）は、宮古入港時の冬の寒さの中、働く人々の緊張感や生理的なふるえが描かれている。田野畑村の津波に残った詩碑にはどの部分の詩語が刻まれているのだろうか？

ことのはスケッチ (393)

今 泉 由 利

「英訳」2 Daniel Sommariva 援護

○わが家に双葉のへちま加はれり二つ命のこの屋根の下

Where there was one, has now become two, life together under one roof.

○星々と同じ素材に出来あがる人の姿を今日クロッキー

Millio'ns of Atoms make up the stars like my self. As I paint a portrait, I sense everything is connected.

○人間の目に見えぬ故人間の言葉もちて暗黒物質

There is something looming deep within the depths of the stars. This mysterious substance darkens my thoughts.

○人工の放射能を身に纏ひ滝のしぶきの天然放射能

Un natural activity is all around me, as is the natural power of the earth.

○中心も果ても無くして宇宙とふ今日の一日のつつがなく過ぎ

There is no begining and there will be no end, but I am, and I will be.

和菓子街道 (59)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

工業都市のイメージの強い四日市だが、市内には老舗が多く残っているのが嬉しい。宝暦年間(1752～1765)創業の紅屋も、四日市屈指の老舗和菓子屋だ。店名は、江戸時代には化粧の紅も扱っていたことからつけられたのだという。

こちらの名物は文化文政年間(1804～1830)頃から作られているという「汐見」。中に餡を入れた真っ白な半球型の落雁だ。かつての四日市は、白砂に青松が影をさす風光明媚な湊町で、海岸には潮の満干を告げる白い波頭が見えていたという。その波頭に散る白玉を題材にして三代目が考案したのがこの菓子だ。

同様の菓子として赤穂・播磨屋の「塩味饅頭」、大津・藤屋内匠の「汐美饅頭」があるが、紅屋の考案は全国的にも比較的早い時期



だったといえそう
だ。

煙突からもくもくと白い煙の立ち上る四日市の海岸線。失われた往時の美しさを留めた菓子に慰められる。

口に含むと落雁と一緒に中の漉し餡もすつと溶ける。すっきりとした上品な甘さ。

◆紅屋

住所:三重県四日市市中部11-5
電話:059-352-3774

お知らせ

▽十月号原稿は、九月一日(木)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△毎月の初校原稿の校正を、山口、小野の二人が担当しております。

各作者の原稿の文字が各々の癖誤り等、文字の小ささ、薄さによって判読のむづかしい場合があります。校正ミスにつながる要因となりますので、楷書で濃く、大きく書いて原稿を送って下さい。

固有名詞(地名、人名等)は、読者に読んでもらえるようにルビをつけてください。△校正を担当するものとして、とても有意義な時間を会員の皆様と共有していると実感しております、皆様の喜び、悲しみ、苦しみ……夫々の思いを正しく誌面に載せていきたいと願っています。

△連日、東北地方の大震災の報道が胸を痛めます。今日は新潟、福島の大雨による河川の氾濫の映像が加わり重苦しい空気が、日本列島を覆っているような日が続きます。会員の皆様には健康に気をつけ日々をお過ごし下さい。

(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様だちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成十三年八月二十五日印刷 第五十八巻 第九号
平成二十三年九月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会
豊川市 御津町 御馬 西三七

T E L (〇五三三)七五・二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇・六・五六三三九

URL
E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage http://maizumiyuri.jp/

印刷所
株式会社 桜 創美